幼稚園教育の解決すべき問題

及川ふみ

幼稚園教諭の待遇改善

幼稚園教育の向上発展の上に、解決せられなければならないと思われる問題は、大小さまざまある。

そのうちでも、最も根幹的なものとして、大きくとりあげたいものは、「幼稚園教諭の待遇改善」である。これは幼稚園教育に関する研究集会などの場合に、常に強く要望されている、幼稚園教諭の資質向上の問題と、表裏一体となる重要な問題である。

この幼稚園教諭の待遇改善の重要性は、国公私立共通するものであるが、とりわけ私立幼稚園の場合にあっては、その声を大にしなければならない。

私立幼稚園の経営上そのほとんどのものは、給与の財源が保育料によってまかなわれている現状である。（もっとも、学校法人の私立幼稚園には、公費の助成もあるが、小学校・中学校・高等学校などのそれに比べて、その率は実に低いものである。したがってこれにも問題がのこされているのである。）

しかし、私立幼稚園の待遇改善の給与に対する財源を、いつまでも、その保育料のみによることは、幼稚園教育の普及のために阻害となることはいうまでもない。これにはもっぱら公費による助成にまつということである。私学振興の一貫した問題として、われわれ幼稚園教育に関係するものは、当局に対してその要請に邁進しなくてはならない。

保護者の正しい幼稚園教育についての理解

当今社会的に、一般教養が進展して、幼稚園児の保護者たちも、育児・教育についての知識を収得する機会が多い。ラジオに、テレビに、雑誌に、講演会にと、それぞれに積極的にすすんでいるのは事実である。しかしなかには、知識は相当にもっているとしても、実際の育児について、ことに幼児の教育については、その知識が充分に活用されていない場合もしばしばあるようにうかがわれる。このことが、幼稚園の実際指導の面に不満となってあらわれてきたり、あるいは、幼稚園教育に対しての別のものが、希望の条件となってくる場合などがあったりして、これらの点がよく考えさせられてくる。

もっと具体的に問題をあげてみると、この頃、顕著になってきている三才児の入園希望者の急増の現象について、幼稚園側で話題になっているが、はたして三才児の保育に対しての真の理解がどの程度になされているか、という点である。保護者たちのうちには、あるいは知的指導のみというかたよったものを多く期待されていないではなかろうか、とうたがわれる点もみえる。

また、これと反対に一年保育のみの希望者も今もって相当あることは一つには、経済的の負担のみとは考えられない点もあるようである。

幼稚園教育ことに実際指導の場において、保護者の理解は、幼稚園教師のその指導遂行の上に重要な問題である。

去る十一月七日、世田谷区の一小学校長より幼稚園と小学校との連絡会開催の招待を受けた。幼稚園よりこそ願わしい会合である。参加者は校長、教頭、一年生担当者三人、二年担任者二人、六年担当者一人、図工、音楽、家庭のそれぞれの担当者など新入学者を身近かに指導せられた先生がたであった。

その席上いろいろの話がかわされたが、とりわけ、小学校より幼稚園にのぞまれていることとして、次のようなことがあげられた。

言語について。

読むこと・書くこと・話すことよりも、よく聞くことに重点をおいてほしい。

読むこと・書くことは、自分の姓名のよみかきができればよい。

数について。

これは、言語の場合ほどに問題はない。一〇まで数えられなくてもよい。

音楽リズムについて。

幼稚園と小学校低学年とは、歌などだいぶ同じ材料があるようであるが、小学校では、よい声でうたう、ただしく歌うなど、質的な点で考慮するから、子どもたちが、一年生になって新鮮な気持ちを失うようなことはないと思われる。幼稚園での歌の指導にあたっては、以上のような面を考えてほしい。

絵画製作について。

できるだけ子どもの表現をいじらないで、のびのびさせてほしい。

この小学校に入学する児童数の八〇％は、幼稚園や保育園の終了者で、残りの二〇％が直接家庭からくるという状態であるとか。

この直接に家庭からきた子どもの指導と、八〇％の集団生活をしてきた子どもと、どのようにかみ合わせていくかが小学校としての問題である。

幼稚園終了の子どもたちが、このような考えをもたれる小学校へ多数入学していくことを考えてみると、ふりかえって幼稚園教育の正しい真の姿は、どのようなものであらねばならないかが、自然によみとられるであろう。

こんどの場合は、児童の指導に熱意の強い小学校よりのはたらきかけの話し合いの会合であったが、地域の小学校と幼稚園との連絡をきんみつにして、あるいは、小学校の教師がたから一年生の指導の実際の様子など、幼稚園の保護者がたにきかせてもらったりなどして、就学前の子どもの指導についての保護者の正しい認識をふかめなくてはならないことである。

幼稚園の教師は実際指導にあたっては、正しい認識をもち、その実践にあたっては、勇気をもってすすみたい

幼稚園の教師は実際指導にあたっては、確たる理念をもってすすみたい。幼稚園教育については相当の知識をもたれているとしても、実際指導にあたっては、その保育精神からそれる場合ができたり、あるいは経験内容の断片的な指導に終始するようなことになったりすることは警戒しなければなら

ない。

たまたま過日、四谷幼稚園のリズム指導を中心とした実際保育を見学することができた。指導者はリズム中心の指導の意図をもちながら、すべてが子どもとの遊びの間に、あるいは自然観察・話しあいなどから、子どもの興味を湧きたたせて、その表現意欲を高めて、経験内容の綜合的な指導がよくなされているのがみられた。

またその後、東京私立幼稚園研究集会においての研究協議〝社会性をのばす保育とはいかなるものか〟について津守講師は、

「社会性が身につくということは、次のようにいいかえることができると思う。

一、自分が集団の中へ入って、その集団のふんいきにぴったりした安定感を得るように位置づけられ、集団のなかで自分自身になっている。

二、他に働きかけることができ、また他から働きかけられたときに反応することができる。

このようなことが、実際の幼児の生活場面では、どのようにあらわされるかといえば、それは「よく遊べる」ということである。

幼児の生活の八割は〝あそぶこと〟であり、あそびを通して、幼児は社会性を身につけていくわけである。」

といわれ、また同じ指導者の黒田講師は、社会性とはどんなものかについて、

「社会性は幼児が幼稚園にはいったときから、芽生えるものでもなければ、またそのときから、身についていくものでもない。それ以前にすでに家庭生活をとおして、形づくられているものであることを忘れてはならない。また幼稚園においても社会性は、六領域の一つである〝社会〟としてでなく、全領域にわたって扱われるべきものである。幼児は幼稚園の生活全体のなかで、他との交渉をとおして、自信・独意を身につけていき、またそれが他との交渉をよりよく、なめらかにしていく。両者がたがいに働きかけ合って幼児の社会性が高められていくわけである。」といわれた。

この二講師の助言は、ともすれば歩みちがえる保育道によきみちしるべともなることを思い、また四谷幼稚園の実際指導をみて、ここに同志のあることを力強く感じさせられたのであった。